性天の霹靂

第 9 章：モーニングタイム

翌朝。

凛 in リーシャ：(朝起きても戻ってなかった…4 人で集まって今後のことを…)

結菜：「あれ？どうしてリーシャが凛の椅子に座っているの❓」

凛 in リーシャ：(あ…)

ヒロ in 凛：「…リーシャもたまには席を変えて気分転換したいんだろ。いいよ、俺…私は宙敬君の席に座るね💕（こんな感じか？)」

ヒロ in 凛はヒロの椅子に最初はいつものように豪快に足を広げて座ったが、すぐに膝をつけて座り直した。

ヒロ in 凛：(女の子の身支度は結構時間が掛かったな…髪は凛のお母さんに手伝ってもらって何とか整えたけど、一人じゃまだできない…もし元に戻れなかったら俺は凛として…)

その頃、リーシャ in 麻美は、保健室にいた。そこへ麻美 in ヒロが入ってきた。

麻美 in ヒロ：「昨日あれから夜遅くまでガールズトークしたから頭がぼーっとしていたわ。」

リーシャ in 麻美：「麻美先生だったら高校生の授業は問題ないですよね❓」

麻美 in ヒロ：「ええ、授業の方はね…山田君みたいに豪放にはできないけど、入れ替わってることがばれないようにしないとだね。頑張ってみる…」

麻美 in ヒロはリーシャ in 麻美に保健医のお仕事の簡単な申し送りをした後、ヒロの教室に向かった。

麻美 in ヒロ：「それにしても山田君にあんな可愛い妹がいたなんて…あんなに慕ってくれるなんて嬉しかったわ😊」

麻美 in ヒロ：(あれ？2 人とも席を変えてる？ってことは私はリーシャさんの席に座ればいいんだね。)

麻美 in ヒロはリーシャの椅子におしりを下ろすと、隣の席の結菜が麻美 in ヒロに声を掛けた。

結菜：「リーシャも凛も別の席で授業を受けるって。席を奪われちゃったね、宙敬君。」

麻美 in ヒロ：「私…僕は構わないよ。水樹さん、今日は宜しくね😊」

それを聞いた結菜は言葉を失い顔を赤らめてしまった…

第 10 章：ランチタイム

昼休みになり、購買部でお弁当を買って屋上で 4 人で昼食をとることにした。4 人とも何とか午前中を乗り切って安堵していた。と、ヒロ in 凛はリーシャ in 麻美が飲んでいたコーヒーを取り上げた。

ヒロ in 凛：「それ、俺に一口ちょうだい！」

コーヒーを口に含むヒロ in 凛だが、その顔は険しくなった。

ヒロ in 凛：「大好きなはずのコーヒーなのに苦くて美味しくない…」

凛 in リーシャ：「あたし、いつもコーヒーにミルク入れてるからカラダが受け付けないのかも❓」

ヒロ in 凛はコーヒーをリーシャ in 麻美に返した。リーシャ in 麻美は、ヒロ in 凛から受け取りコーヒーを口にした。

リーシャ in 麻美：「あたし、コーヒーよりも紅茶派なんだけど、今日は何故か無性にコーヒーが飲みたくなったのよね🤩ブラックで。」

ヒロ in 凛：「これってカラダが変わったから嗜好も変わっ…」

そう途中まで言い掛けたヒロ in 凛が言葉を失い、意識も失って倒れた…

麻美 in ヒロ：「山田君❓……ちょっと……心臓は動いているし、息もしている…」

麻美 in ヒロは慌ててヒロ in 凛のカラダを起こし、胸に手を当てて鼓動を確認する。

リーシャ in 麻美：「昨日、凛のカラダになって嬉しくて眠れなかったんじゃない❓😌」

凛 in リーシャ：「そんな…あたしなんかで嬉しくなるなんて…」

リーシャ in 麻美：「何言ってるの？凛は可愛いんだからもっと自信を持っ💪…」

そう途中まで言い掛けたリーシャ in 麻美も言葉を失い、意識を失って倒れた…

麻美 in ヒロ：「リーシャさん❓……心臓は動いて息もしている…このコーヒーに何かあるの❓❓」

麻美 in ヒロは同様にリーシャ in 麻美の鼓動を確認する。そして、不思議がっている麻美 in ヒロと凛 in リーシャの前で二人が目を覚ました！

第 11 章：リカレンス

？？in 麻美：「…あれ❓俺、どうしてたんだ❓」

？？in 凛：「…あたし、寝落ちしちゃった❓」

凛 in リーシャ：「もしかして、そっちの麻美先生のカラダにいるのが宙敬君で…」

麻美 in ヒロ：「あっちの神宮司さんのカラダにいるのがリーシャさん？？」

　お互いに顔を見合わせて頷く二人。

ヒロ in 麻美：「このコーヒーのせいのようだな…」

凛 in リーシャ：「コーヒーじゃなくて…お互いに口を付けた後飲んだからかも？」

リーシャ in 凛：「間接キスね…でも昨日は何回キスしても入れ替わらなかったよ…」

麻美 in ヒロ：「何か他に条件があるのかも？試しに私と神宮司さんが同じことをしてみない❓」

　頷く凛 in リーシャ。先ほどと同じように交互にコーヒーを飲むと…期待通りに凛と麻美は入れ替わることができた。昼休みが終わろうとしているので、放課後、4 人は教室に集まることにした。

　リーシャ in 凛はリーシャの椅子に座った。ヒロの魂が入っていた勝ち気で豪快な凛は、リーシャの魂に変わることで笑顔の可愛い女の子へと戻った。

　凛 in ヒロは凛の椅子に座った。ヒロの肉体は麻美の魂が入っていたせいで落ち着いた男の子となっていたが、凛の魂に変わって庇護欲をそそる守ってあげたい男の子になった。

　麻美 in リーシャは、水樹結菜の椅子に座った。凛の魂が入ったことでしおらしくなっていたリーシャだったが、麻美の魂に変わったことでミステリアスな大人の美少女の雰囲気を醸し出していた。

　そしてヒロ in 麻美は、ヒロの椅子に座った。リーシャが入って天真爛漫だった麻美は、

ヒロの魂に変わることで勝気で豪快な女の子に変わってしまった。ただ昨日とは違い股を開かないよう膝をつけて座っている。

第12章：インフルエンス

凛 in ヒロ：「こうやって互いに顔を合わせると、みんな昨日とはちょっと雰囲気が変わっているね。」

ヒロ in 麻美：「俺は麻美先生のカラダだって意識して座っているぞ。」

麻美 in リーシャ:「その気遣いは嬉しいんだけど…できればその怖い表情も止めようね💦」

リーシャ in 凛：「凛は昨日と違って堂々と椅子に座っているわね👏」

ヒロ in 麻美：「凛は俺のカラダを気に入ってくれたってことだ。」

麻美 in リーシャ：「そんな訳ないでしょ💦」

凛 in ヒロ：「そうかも…」

凛 in ヒロの返しに麻美 in リーシャとリーシャ in 凛はもちろん、冗談のつもりで言ったヒロ in 麻美も驚いた。

リーシャ in 凛：「…あたし、昨日麻美先生のカラダになっていたとき、椅子に座ったらおしりがすごく気持ち良くて…他にも今までと感覚が違ってた…」

麻美 in リーシャ：「私は山田君になって、咲夜ちゃんが自分の妹のように思えて愛おしかったわ😍」

ヒロ in 麻美：「そう言えば咲夜とは最近あまり話をしていなかった…俺は凛になって…」

凛 in ヒロ：「え…何？…言えないことしちゃったの？🤡」

ヒロ in 麻美：「違うよ！…ただ女の子は表情であんなにも変わるんだな、って…」

麻美 in リーシャ:「男の子も変わるわよ😉山田君ももっと柔らかい表情をすれば良いのに。」

リーシャ in 凛：「麻美先生がヒロのカラダに乗り移ってた間、女の子受け良かったみたいですね😊」
凛 in ヒロ：「あたし…宙敬君のカラダに入ってからカラダの奥底から自信が湧き上がってくるみたいなの💪」
リーシャ in 凛：「カラダの影響を魂が受けてるってことかしら❓」
　4 人はこれまでの自分とは違う感覚を感じながらも、元に戻れる兆しがなく、日が暮れ始めたため、それぞれ肉体の持ち主の家へと帰宅した。

第 13 章 A：オーメン
　凛 in ヒロはヒロの家に戻ってきた。
咲夜：「お帰り～お兄ちゃん。」
凛 in ヒロ：「咲夜ちゃん…なんて可愛いの💕」
咲夜：「あ…今日も昨日のお兄ちゃん？」
凛 in ヒロ：(思わずきゅんっとしちゃって、でも…何…股間が張って苦しい…)
　そんなとき、ヒロ in 麻美から LINE が届いた。すぐに麻美先生の部屋に来てほしいということだった。
凛 in ヒロ：「ごめんね…咲夜ちゃん、急用で出かけることになったからまた後で…」
咲夜：「うん。お部屋で待ってるね。気をつけてね。お兄ちゃん💕」
　凛 in ヒロは急いで麻美先生の部屋に向かった。部屋の前でヒロ in 麻美が待っていた。

凛 in ヒロ：「どうしたの？…宙敬君？」
ヒロ in 麻美：「凛、お前は大丈夫か？」
凛 in ヒロ：「ん…何が…」
　ヒロ in 麻美は、そう言い掛けた凛 in ヒロの股間に触れる。
ヒロ in 麻美：「やっぱり、な。まあ、中に入れよ。」
　凛 in ヒロは恥ずかしそうに頷き、ヒロ in 麻美の後に続き部屋に入った。
凛 in ヒロ：「違うの、あたし！咲夜ちゃんに何もしてないから！！」
ヒロ in 麻美：「そっか、咲夜を見てそうなっちゃったか。昼間の話を聞いて、お前も気持ちの変化があるみたいだったから、大丈夫かなと思って俺の部屋に呼んだんだ。」
凛 in ヒロ：「ただ可愛いって思っただけなの😥それなのにこんなに大きくなっちゃって…」
ヒロ in 麻美：「しょうがないよ。凜は男初心者だから。」
凛 in ヒロ：「宙敬君は麻実先生のカラダに入って大丈夫なの？」
ヒロ in 麻美：「おなかの奥の方が強烈に何かを欲している感じなんだ。あ！でも、安心してくれ！俺は凜を襲ったりするために部屋に呼んだつもりはないから！」
凛 in ヒロ：「ふふっ。宙敬君は優しいね。今はあたしが宙敬君を襲っちゃうかもしれないのに（笑）」

第 13 章 B：オーメン
　一方、リーシャ in 凜は、今日家族が一晩留守にしていることを思い出した。
リーシャ in 凜：「麻美先生、今夜、あたしの家、誰もいないから一緒に過ごしませんか？」
麻美 in リーシャ：「いいわよ❣身体の持ち主がいた方が何かと安心するし。色々とお話ししましょ。あ、神宮司さんは大丈夫なの？」
リーシャ in 凜：「ええ、リーシャの家にお泊りって言えば大丈夫のはずです。」
　二人はこうしてリーシャの家で一夜を明かすことにした。
リーシャ in 凜：「麻美先生、昨日、カラダを借りていたとき思ったんですけど…大きなおっぱいってのも大変ですよね。」
麻美 in リーシャ：「そうなのよ…🤯リーシャさんも胸が大きいからお互い苦労するわね……リーシャさん、実はあたし、昨日、山田君のカラダでセーラー服を借りてみたの…そのときにブラジャーをしてみたの。」
リーシャ in 凜：「え～、あのヒロが女装を？写メとか撮ってたら見せてください😍」
　麻美 in リーシャは妹の咲夜に撮ってもらった写真をリーシャ in 凜に見せた。
リーシャ in 凜：「わー😍もう女にしか見えないじゃない！咲夜ちゃんともそっくり！やっぱり兄妹ね。乗り移っている麻美先生もいい表情してるし…ブラジャーしてみてどうでしたか？ヒロのカラダで🤤」

麻美 in リーシャ：「ええ…胸が優しく包まれる感覚は男の子でも同じだったわ…あの男らしい山田君をあたし色に染めて思い通りに操っている倒錯感がたまらなかったわ😆そしてね…」

麻美 in リーシャはリーシャ in ヒロをベッドに押し倒すと、自分とリーシャの服を脱がせた。

リーシャ in 凛：「ああ…麻美先生、何を…」

麻美 in リーシャ：「そのときにあたしの中に流れ込んできちゃったの♂女の子を可愛がってあげたいっていう男の子の感覚が…」

第 14 章 A：エロ―ジョン

ヒロ in 麻美：「…凛…俺、お前を楽にしてあげたいんだ！」

凛 in ヒロ：「あたしを楽に？」

ヒロ in 麻美：「ああ…男のカラダはそうなっちゃうと、一発抜かないと元に戻らないんだ。でも麻美先生のカラダで本番をしちゃう訳にいかないから…俺がこの手で！」

凛 in ヒロ：「あたしがイクのを手伝ってくれるってこと？」

ヒロ in 麻美：「いや、か？」

凛 in ヒロ：「いえ…」

ヒロ in 麻美：「じゃあ、始めるぞ。」

凛 in ヒロ：「うん💕」

ヒロ in 麻美は、凛 in ヒロを前に立たせて、前かがみになり、顔をヒロの方に近づけた…腰のくびれと大きな胸が強調される。少し開いた足は麻美らしくなくヒロの仕草が出ていたが、それが却って魅惑的で凛 in ヒロの股間のモノを更に大きくそそり上がらせた。

凛 in ヒロ：「宙敬君、その仕草、とっても興奮しちゃうんだけど💕」

ヒロ in 麻美：「ああ…そんなつもりはなかったけど、そうなっちゃったな。」

ヒロ in 麻美は凛 in ヒロのズボンとボクサーパンツを下げ、中のモノをその手で優しく包んだ。その表情は優しさに溢れている。凜の心が蕩けていく…

凛 in ヒロ：「宙敬君…胸も…触ってもらえない？」

ヒロ in 麻美：「いいけど…俺、胸は感じたことはないぞ。」

そう言いつつも凛 in ヒロのシャツを脱がして、胸に触れるヒロ in 麻美。触れた瞬間に凛 in ヒロのカラダがぴくんとのけぞった。凛 in ヒロは両手で口を押さえている。

ヒロ in 麻美：「声を出していいぞ、凛。」

ヒロ in 麻美は、凛 in ヒロの手を取り、口元から離した。途端に口元から吐息が漏れ、快感が声に出る。

凛 in ヒロ：「あんっ💕これが男の子の快感なんだね。」

ヒロ in 麻美：「満足してくれて俺も嬉しいよ。」

ヒロ in 麻美は緩急をつけて凛 in ヒロの胸を弄んだ。その度にヒロ in 麻美は敏感に反応

してくれた。そのことにヒロ in 麻美は悦びを感じていた。

第 14 章 B：エロージョン

リーシャ in 凛：「んん…凛のカラダなのに…」

麻美 in リーシャ：「今はあなたのカラダだよ。自分とは違うカラダの感覚、感じてみたくない👄」

リーシャ in 凛：「凛の感覚…」

麻美 in リーシャは、その指でリーシャ in 凛の全身をフェザータッチする。快感に抵抗することができず受け入れるリーシャ in 凛。

リーシャ in 凛：「ん…ゴメンね、凛…」

麻美 in リーシャ：「リラックスしてね…女の子の感じ方も同じじゃないのよ。今あなたが感じているのは神宮司さんの性感帯…今まで感じたことない快感でしょ？」

リーシャ in 凛：「凛の…」

麻美 in リーシャ：「神宮司さんの胸は大きくなっている途中…こうして刺激してあげると成長が進むのよ😆」

リーシャ in 凛：「凛の胸をあたしが大きくしてあげてる…😊」

麻美 in リーシャ：「そう…私が入ったあなたのカラダと、神宮司さんに入ったあなたの魂がそうさせているの…何も悪いことじゃないでしょ？そしてあなたのカラダもあなた自身の手で育てるのよ…自分のカラダだから気持ち良いところは良く分かっているでしょ？」
リーシャ in 凛：「麻美先生…あたしはここが…💕」
麻美 in リーシャ：「いいわ…リーシャさんのカラダ…😍」
　二人はお互いのカラダを慰め合い、快感を共有し続けた。
リーシャ in 凛：「麻美先生…男の子に挿入されるってどんな感じなんですか？💗」
麻美 in リーシャ：「そうね…おなかの奥から幸福感がカラダ全体に広がる感じかしら…」
リーシャ in 凛：「今感じているこの快感よりももっと気持ち良いんですか？」
麻美 in リーシャ：「ええ…私がまた山田君になったら、やってあげよっか？」
リーシャ in 凛：「あ…はい😍女も男も経験してる麻美先生なら安心です！」
　二人は夜遅くまでガールズトークで盛り上がった。そして夜が明けた。